
極楽鳥＜ゴクラクチョウ＞

瑞貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極楽鳥くゴクラクチョウ

【Nコード】

N7356L

【作者名】

瑞貴

【あらすじ】

転移陣の事故に巻き込まれ落ちたのは鳥たちの楽園、南の島。
そこで出会った妙な男は私を番と^{つがい}呼んだ。

※野生児（男）×軍人（女）です。

第1話（前書き）

※R15です。性的な描写があります。

第1話

「……チ」

ミソラは四肢を枝に引っ掛け、体を安定させると唸った。

落下した時に右の手首を捻ったようだ。こんな時にと悪態を付く。じっとりした暑さと、まわり付き湿気、鼻腔に感じる潮風、そして見下ろした周辺に群生する植物でここが南方の島だという予測は付く。

東に戻る予定だったのだが、とミソラは左手で胸ポケットからタバコを取り出すと火をつけた。

（さて、どうするか）

事の起こりは転移陣の誤作動が原因だ。

以前から転移先が狂うという事故は300回に1回程の割合で起きていたのだが、科学者達が躍起になって研究しても今だに改善策は見出せなかった。

ミソラ自身も7年間で2回だけ誤作動を経験したことがあったが、今回のように空中で放り出されたのは初めてだ。

幸い簡易パラシュートを装備していた事で何とかだったが、なければ死んでいた。

言ってもどうにもならないだろうが、帰ったら科学者どもに抗議しようと思つた。

ギラギラと焼き付くような日差しに目を細め、逃げたカラフルな鳥たちが森へ戻ってくる姿を眺めて紫煙を吐き出す。

吸殻を携帯灰皿にねじ入れると、ミソラはベルトからサバイバルナ

イフを引き抜き、絡まった簡易パラシュートのロープを切った。
邪魔な荷物を先に地面へ落とし身軽になってから真っ直ぐな幹を伝
い降りたのだが、右手首の激痛にバランスを崩す。

（くそっ！）

ヤバイと思った時には遅かった。ミソラは自分の身長の上
る高さから再び落下した。

掴まることの出来る枝はないかと四方に手を伸ばすが、ツルリとし
た幹に枝などない。

仕方なく衝撃に備えようと身構えたミソラの体はドサリと何者かに
受けとめられた。

驚きつつバツと相手を確認したのは身に染み付いた習性か。

真っ先に目に入ったのは右腕に巻いた極彩色の鳥の尾羽。次いで目
が合ったのはデカイ20代前半と思われる男だった。

金色の髪は伸び放題で無造作に外へと跳ね、二重瞼の大きな青い垂
れ目がミソラを見つめている。

肌は褐色に良く焼けているが顔立ちはアングロ・サクソン系かと思
われた。

男の引き締まった裸の胸には鈍い銀色のドグタグが揺れており、
ミソラの体に回された男の腕もひどく逞しいものだった。

（何者？同業者か？）

ミソラが口を開く前に男は無邪気な笑顔を見せた。口元の緩みきつ
た心からの笑顔だ。

グイッとミソラを立たせると更に大きな口を開けて笑い出す。

男は160cmのミソラより50cmは頭の位置が高かった。2m
越え。見上げるほどデカイ。

「天から、降りてきた、よな？」

男は低いハスキーボイスでそう言うと、答えようとしたミソラの唇を行き成り塞いだ。

強い力で首を押さえられ、避ける事も出来ない。

「は、んっ！……ん！……あむ……！」

乱暴に強く唇を押し付けられミソラの口内は舐め回された。

技巧なんてどこにも感じられないただ苦しく不快なだけの幼稚な口付けだ。

それでも噴飯ものだが男の手はミソラの胸をガツシリと鷲掴みにすると遠慮ない力で揉み始めた。

服の下にも手を入れられそうになり痛みに呻きながらミソラはキレた。

（このっ！）

男の股間目がけて蹴り上げようとしたミソラの足が空を切る。男が素早く身を離れたせいだ。

吊るしていたホルスターからミソラも素早く銃を抜き、男の額に照準を合わせた。

「ふざけるな。誰だ、貴様は」

男は銃を見てもキョトンとただだけで口元の唾液を拭うと笑いながらミソラに近づこうとする。

「動くな。撃つ」

ミソラは決して油断などしていなかった。しかし。

男の大きな体が沈むと視界から一瞬で消え、気づけばミソラの右手首ごと銃を握りこまれていた。

突然襲った痛みにミソラが悲鳴をあげた隙に銃を奪い取られ、背後の断崖絶壁から捨てられる。

ミソラは鋭く睨んで男から距離をとった。今度はサバイバルナイフを引き抜き構える。

男は「怒ってるの？」と笑っていた。

（なんだ、ヘラヘラとこの男は。狂人か？）

警戒し構えを解かないミソラに男は笑いながら言った。

「ようこそ、”楽園”へ」

「ああ?!」

ドスの利いた声を出したミソラに男が怯むことはなかった。益々嬉しそうに笑うと男は両手を大きく広げた。まるでミソラに飛び込んできてと言わんばかりだ。

男とミソラは無言でしばらく距離を保っていたのだが、先に男が両手を広げたままの姿で眉をヘニヤリと下げた。

来ないの？と言いたげな瞳が潤み口がへ字になる。男は手を下ろそうとしては、考え直したかのようにまた広げ直していた。

泣くのを堪えた様な男の表情にミソラは困惑した。本当になんだこいつは。これではまるで子供のようなではないか。

心の迷いに剣先がぶれる。

その瞬間、男は前へ飛び出しミソラのナイフの柄を叩き落とした。

「な?!」

驚くミソラに構わず、男はミソラの腕を掴むと自分の胸に引き寄せた。

デカイ男に体重をかけて抱え込まれてしまえば、ミソラに逃げ出す術はない。

裸の胸から顔を離そうともがくうち、男の腕の尾羽がミソラの頬を傷付けた。

「あゝあ」と呆れたように声をあげた男に舌で傷を舐られ、ミソラは鳥肌を立てる。

「何をする！離せ！」

素足をブーツで踏んだ時に男が顔を顰めたのは見えたが、クルリと向きを変えられミソラは背中を木の幹に押し付けられた。

そのまま地面から持ち上げられ、両足の間に男の足がねじ入れられる。

逃れようと身を振るミソラの腕を片手でまとめ、男は鋼のような力で放そうとはしなかった。

「まるでヒクイドリだな」

一人頷く男の顔は涼しげで、真っ赤になって抗っていたミソラは息を吐いて動くのを止めた。

ミソラの力が抜けると、男も拘束の力を弱めてくれる。

瞳を覗き込まれ視線をそらすと顎をつかんで引き戻された。ミソラの黒い瞳と男の青い瞳がお互いを計ろうとするように交わった。

「夜の色だ」

どこか期待に満ちた声色で男はミソラの髪留めを外す。

「止めろ」というミソラの制止はまるで聞いていない。

ハラリとミソラの黒髪が肩甲骨まで滑り落ちた。まとめていた癖がつき、緩いカールを帯びた黒髪を摘んでは放す。

しばらくその手触りを楽しむと、男はにんまりと笑った。

「髪も夜の色」

男の手がミソラの軍服の襟を掴んでボタンを引き千切った。制止する間もない。

男はミソラの鎖骨を撫で、その下に続く胸にも触れる。ミソラの胸に置いた自分の手をジッと見ながら不思議そうに言った。

「俺と違う白い肌」

「……あっ！」

男はミソラの胸の頂をゆっくりと擦ると、次にミソラの唇に触れた。待ちかねたように指を噛もうとするミソラを笑い、男は腕から手首へと拘束の場所を変える。

ギシリと力一杯握られ、捻った右手首から脳天を貫く痛みが走った。もう一度大きな悲鳴を上げ開いた口内に、男は無遠慮に指を入れる。ミソラの舌を力を込めて掴み出す。

「噛むのは駄目。わかった？」

楽しそうに告げる男の瞳に悪意は感じない。それが無性に怖く冷や汗を流しながらミソラは頷くしかなかった。

男は頷いたミソラを「いい子だね」と目を細めて褒め、舌へ柔らかく指を這わし始めた。

舌や歯や唇を丹念に何度も指で辿られて、ミソラは嘔吐と眩暈を起こしそうになるのを必死に堪える。

やがて満足したのか男はミソラの唾液まみれになった指を引き抜くと舌でペロリと舐めた。

「ここは花の様に赤い」

頭に花が咲いてるのは貴様じゃないか、とミソラは言い返したくて出来なかった。

男がミソラの顎に伝った唾液を舐め取り、目の前で花がほころぶように笑って宣言したからだ。

「待っていた。俺の番^{つがい}」

ミソラは真実眩暈を起こした。

第2話

——ガガガ……ピ……ガガ……

「駄目か」

ミソラは天を仰いだ。

腕時計に組み込まれた通信機は、遮る物がないこの崖で何度試してみても役に立たない。

後は、もう一つ組み込まれている発信機を頼りに迎えが来る事に賭けるしかないだろう。

（5分5分か）

来るなら厄介な事にならないうちに早くして欲しいものだ、とミソラは思う。

ミソラは自分の軍での立場を理解していた。

数年前の世界大戦でミソラの部隊は敵国への夜襲に新型の生物兵器を使った。

多くの犠牲を出しながらも作戦は成功しミソラ達は国を勝利に導いたのだが、無名の科学者が作ったといわれる”ソレ”は思った以上に非人道的な効果を示し敵国へ甚大な被害と恐怖を与えた。

大戦が終わって、世間から”ソレ”を使用した判断に疑問を持たれるのは当然の世の流れだ。

軍はバッシングされ、直接上からの命令で動いたミソラの部隊は名指しで衆目に晒され仲間は皆バラバラに別の部隊へと配属されていた。

しかし、そこで待っていたのは同じ軍人仲間から向けられる侮蔑の視線。

懲罰を恐れて表立って言うてくる者はいなかったが、その視線は”人でなし共”と明確に語っていた。

その頃すでにミソラ達は軍の厄介なお荷物だった。

例え上に立つ者や自分達軍人への非難を肩代わりさせるのに便利な存在だったとしても、だ。

だが皮肉なことに黒幕連中の名前と真実を知っているミソラ達を軍は野放しにはしなかった。

世間には公表されていないが、最後まで”ソレ”の使用に否定的だった反対派トップのミソラの部隊長が前日の夜心臓麻痺で急死するなど出来すぎではないか。

ミソラの部隊には馴染みのない新しい隊長が就任したが、指揮系統が混乱した状態のまますぐに上から命令が下された。あの夜生き残れたのは奇跡だと今でも思う。

しかしその時生き残るべきではなかったのだ。

生き残ったミソラ達は口封じするには数が多く、軍は目の届くところで監視する道を選んだ。

負傷者の退役すら認められず、軍を表立って批判した仲間の何人かは謂れない罪や事故を装って殺された。

念入りなこつてとミソラは軍の連中を嗤う。全く馬鹿馬鹿しい話だ。そもそも自分達は軍人として命令を遂行しただけだ。

信頼してた隊長を失い個人としての思惑はあれど、あのお互いの命

を背負いあった混乱した戦場でミソラ達に命令されたことをやる以外何が出来たというだろう。

なのに命令を下した責任者——軍のトップ集団の実態は自分のケツも拭けないチキン共ときたもんだ。

戦争を終結させた英雄として持ち上げられていた時は我先にと神輿に乗りたがっておいて、逆風が吹いた今では『自分』は無関係だと嘘で固め、責任をミソラ達や死んだ部隊長に押し付けたまま自己保身に奔走している。

その癖、軍はいつ死んでもおかしくないような危険な任務ばかりをミソラ達に宛がっていた。

飼い殺し。

その言葉はもう聞き飽きた。

ならばいつそのこと一気に全員殺せばいいのだ。

なのに、奴らは大量死を演出するのは危険だと考えているのだろう。世間に不審を抱かせないよう、列に並んで順番に死ぬことだけをミソラ達は期待されている。

死線を共に乗り越えてきた仲間達は見えない力に押し潰され、生きること絶望し——。1人2人と掬った水が零れるように欠けていった。

逃げ出したくても逃げられない現実の中、ギリギリの状態でミソラ達は生きていた。

今回の事故で狙い通りミソラが死んでいるなら良し。

だが、ミソラが生きているならば放っておくのは拙いとは判断するだろう。

こちらから連絡を取ってやる必要はないのだが、取らなければ軍規

違反と理由を付けられとつと処分されるだけだ――嬉々として。親や親戚から見放され居場所のないミソラは、今更命を惜しむつもりはない。

だが、人に踊らされて死ぬ気もない。

死ぬなら任務で。

軍人として一つだけ残ったミソラの矜持だ。

「ミソラ、またここに居たの？」

「ライコ」

木の枝から飛び降り、満面の笑みで駆け寄って抱きついてくるライコに私は苦笑した。

2m越えのデカイ図体の癖に、窮屈に体を折り曲げてまでミソラの胸に擦り寄ってくる。

「ほら。こんなに葉が付いてる」

大人しく頭をミソラに向けるライコ。

ミソラは一枚づつ長い金髪に絡んだ葉を取り除いてやった。

(……時々尾を振る犬に見える)

今もパタパタと見えない尾がちぎれるように振られている。

外見は鳥なのに、と腕飾りの尾羽を揺らしながらミソラは笑った。

この島へ来て2週間。

この男、ライコとの付き合いも2週間だ。

今では友好関係なるものを築けているが、最初は押し倒されたり痛めつけられたりと散々な日々だった。

男がミソラが抵抗しなければ乱暴な事をしないと判断するまで1日。隙あらば押し倒そうとするライコのかわし方を覚えるのに更に2日。この島の情報を得るのに1週間で費やした。

危険な動物が少なく鳥達の楽園であるこの島は、文字通り”楽園”という名前だと言う。

地図上のドコにあるのかライコは知らない。

ライコはこの島で父と2人だけで暮らしていた。母の顔は覚えていないと言う。

その父はライコが12の時に死んだ。

それからずっと一人。

言葉を忘れないよう鳥に語りかけたり、魚や小動物を狩ったりと父の教えを守りながらライコは生きてきたようだ。

意外にもライコはミソラがこの島から飛び立とうとしない限り島の南側では自由に過ごして良いという。

ライコは実に興味深い男だった。

彼は自分のルールに則ってこの”楽園”を統べている。異常がないか小さくもない島中を見回るのもライコの日課の一つだ。

だからその間こうしてミソラ1人で息をつける時間があるのは助かる。

だが、どこにいてもミソラを見つけ出すライコの天才的な嗅覚には

少しでも面白くないと不満を持っていた。

「番の匂いぐらいどこにいてもわかる」とライコは誇らしげだが、ミソラはまだ、番と言われることに慣れないし認めていない。

何故こんな勘違いをされるのか。

ライコの父は死ぬときに言ったらしい。

”いつか、神がお前の元へ天から番を授けてくれるだろう”と。

今わの際、一人になる息子を慰めるための優しい嘘だろうが迷惑な話だとミソラは思う。

ライコは毎日神に番が欲しいと祈りを捧げ、それが聞き入れられたと信じている。

見たこともないパラシュートで空から降りてきた場面をすっかり見られていたからには当然の成り行きだ。

どれだけミソラが「事故だったのだ」と話してもライコは首を捻るばかりで理解できない。

ある日「翼、切ってしまったんだな」と真顔で言われた時には開いた口が塞がらなかった。

その後「俺も翼はないけれど、お前を抱えて飛ぶことは出来るから安心しろ」と言われ高い崖から実演されて目を回した。

そんな事が続けば、ミソラもライコを説得するのは諦めた。

ライコを殴って言い聞かせるわけにもいかないし、どうせ返り討ちされるのはミソラの方だ。

ライコは良い意味でも悪い意味でも強く純粋な男だった。

「ミソラ」

ライコが私を抱き寄せた。

自分の足の上にミソラを向かい合わせに座らせる。

背中を丸めてコツンと額を合わせてきたライコは蕩けるような顔をしていた。

ライコはスキンシップが大好きなのだ。抵抗しても無駄なのは身に沁みている。

ミソラミソラと名を呼びながら頼ずりする彼に、ミソラは彼の孤独を思う。

ミソラはため息をついてポスンとライコの胸にもたれかけた。こうすればライコが大喜びするからだ。

果たしてライコは歓声をあげミソラを抱きしめ、彼女の温もりを存分に味わった。喜ぶライコの顔を見るのは悪くない。

好きにさせておくとしばらくの間、髪を撫でたり腰を揺らしたりしていたがそのまま唇を重ねようと寄せてきたので手で押さえる。

「まだ発情してない」

その言葉を聞くなりライコが目を潤ませた。

「ミソラの発情期はいつ来る？」

「もう少しかかる」

「じゃあ、せめて口移しはいい？」

「断る」

ライコは癪癪を起こしてミソラを膝の上から転がすと飛んでいってしまった。文字通り枝に飛び乗り、飛んでいくのだ。

ミソラは再びため息をついた。

出会った頃感じた恐怖はもう感じない。

ライコから必要以上に苦痛を与えられたり威圧されたのは、どちらが上かを叩き込むためらしい。

ミソラは軍で拷問方法や捕虜の扱い等も一通りレクチャーされていたから、素直に原始的なライコのルールを受け入れ許した。

自分でも出来るとはいえ寢床も食べ物も用意してくれ、マメに世話してくれるライコは嫌いじゃないし、むしろ可愛い。

この島でライコの保護は必要なのだ。

だが、彼は思春期を鳥と過ごしたせいなのか人間の性と鳥の性を確実に同一視している。

スキンシップが好きなのはいい。ミソラの気を引こうと歌ったり踊ったりするのもまだ許せる。

しかし、ライコは出会ったその日から咀嚼した食べ物を口移しでミソラに与えようとするのだ。

求愛行動らしいが、両手を拘束されて洗礼を受けたミソラは今でも思い出すと気分が悪くなる。

（やはり勝算は薄いがもう一度挑戦すべきか……）

生娘ではないミソラは、一度正しい人間の性教育をライコに施そうとしたのだが――。

「なぜ？」「どうして？」と無垢な瞳で繰り返し聞かれてしまうと、こちらが気まづくなり途中で匙を投げてしまう。

見た目だけは立派な成人男性に良い年した女が、めしべとおしべの話をするのだ。

やはり実践が一番なのだろうか……。ミソラの最近の悩みだ。

セックスなど命令があれば誰とでもこなす、ただの運動だとミソラ

は思っている。

だが、ライコの裏表のない純粹なところを目にするたび擦り切れ汚れた自分が触れるのは躊躇われ、どうしても一步を踏み出せなかった。

第3話

意外なことにライコは綺麗好きだ。

暑いからもつともだが一日に何度も水浴びをする。

「ミソラ、行こう」

ミソラの返事も聞かず、ライコはミソラの腰に腕を巻きつけヒョイと抱き上げた。

いくら体格が違うといってもすごい力だ。

「ライコ！自分で歩けるといつも言っているだろう?!」

「ミソラは遅いから駄目だ」

「ではせめて背負え!」

「え〜?」

何が『え〜?』だ、とミソラは思ったが「それじゃミソラの顔が見れない」と口を尖らせるライコに不覚にも動揺してしまった。

ライコはミソラにストレートに好意を示す。

人から久しく好意を向けられていなかったミソラは、それが思った以上に嬉しいのだけれど怖くもあった。

いつかライコも自分を嫌うのではないか、要らないと捨てるのではないかと思うと怖くて怖くてどうしていいかわからなくなる。

島の奥、高台に湧いた水場にミソラはいつも連れて行かれた。

いつものようにミソラを降ろすと、ライコは腰に申し訳程度に巻いたボロ布をさっさと取り一目散に水に飛び込んだ。ミソラを構ったりしない。

何度も水に潜り楽しそうにしているライコを眺めてから、ミソラも

木の下で服を脱ぎ始めた。

ミソラは汚れることには慣れている。だが恋人でもない男と一緒に裸で水に入るといふのは出来れば遠慮したい。

最初に連れて来られた時にミソラはライコに交代で水浴びしようと提案した。

だが、頑固なライコはこの水場で一緒にとミソラの希望を跳ねつけた。

困惑はしたがライコに逆らう気がなかったミソラは、思い切って一緒に裸で水を浴びるようにしていた。

羞恥心は感じるが、ライコの視線はミソラから離れている事が多いし邪なものは感じられない。

それに年上としても、軍人としても内面は子供そのもののライコに裸ごときで恥らってたまるかと思う気持ちもあった。

ミソラのなけなしのプライドだったのかもしれない。

ミソラは洗濯もこの時一緒に済ませるようにしていた。

今日も水場で別行動になる筈だったのだが。

いつもは感じないライコのジツと見つめる視線を背中に感じた。

振り返ると案外近くにいた青い瞳と目が合う。ミソラの心臓がドキリと鳴った。

ミソラはそれを気のせいだと誤魔化し、さりげなく肩まで水に浸かった。

「何？」

「ミソラ少し伸びたな」

ライコはザブザブと近くまで来るとミソラの黒髪を摘んだ。

「切っていないからな」

我ながら可愛くない答えだとミソラは思う。

ライコは徐に頭上の木に手を伸ばした。ミソラが思わず息をつめる。ライコはそんなミソラに気づかず何度もポキリと手折った赤い花をミソラの頭に飾っていく。

挿し損ねた花が水面を赤く彩った。

「ミソラの黒い髪には鳥の羽より赤い花が似合う」

青い瞳が真剣にミソラを見つめた後、その眦がゆっくり垂れる。満足げに笑うと、ライコはミソラの肩に口付けを落としてそう言った。

「やっ！」

「ミソラ？」

ライコは急に身を翻したミソラに目を丸くしていた。

この程度のスキンシップなど普段と変わらない。なのにミソラは少女のように赤くなりライコの顔を見れない自分に困惑していた。

馬鹿な！それだけがミソラの頭を支配する。

「さ、先に上がる！」

狼狽したミソラは背を向けたままザブリと水から上がるとムンズと服を引っつかんで駆け去った。

「変なミソラ？」と残されたライコは首を捻るばかりだった。

その夜はいつになく蒸し暑かった。

父が作ったと誇らしげに語ったライコの高床式のツリーハウスは風通りが良かったが、彼の腕に抱き寄せられて眠っているのでは意味がない。

ミソラの上に乗った重い腕を持ち上げようとすると、ライコの眉間にシワが寄り反対の腕で抱き直されてしまった。
ミソラの眉間にもシワが寄る。

「ライコ、生理現象だ。どけろ」

その言葉に「うゝゝゝっ？」と唸り、ようやくライコはミソラを放す。

眠りが浅いなら早く放して欲しいとミソラは思ったが、言っても無駄なので黙って地上に降りた。

鳥たちが眠ったこの島は今は小動物の活動時間だ。ネズミやモモンガなどが森では活発に動いているだろう。

「“楽園”か――」

平和な島だ。

人間が来ることも無く、危険な動物もない。手付かずの自然がそのまま残っているこの状況は確かに奇跡だ。

島の外へ出れば、まだまだ戦争の爪あとが残る国はたくさんあるというのに……。

ミソラは久しぶりに外の世界を思った。

（軍はどう動いているだろう。私を探しているだろうか？）

ここに来た頃は、早く戻らなければと思っていた。しかし今のミソラは軍に戻りたいとは思わなかった。

ライコと2人の生活は心地良く、久しぶりに”楽しい”という感情をミソラに思い出させてくれた。
それだけに、軍の迎えが来るのではないかとミソラの不安は日ごとに増していった。

胸ポケットに大事にしまっていた最後のタバコを取り出す。

「変な匂いがする」と嫌がるライコの前では吸えないから、ミソラはこうして1人になった時だけ吸うようにしていた。

カチリと火をつけ胸いっぱい煙を吸い込む。

口に広がる苦さがタバコのせいなのか気持ちのせいかわからない。ミソラにはわからなかった。

「さて……」

ラスト1本を吸い終え、ミソラは自分の腕に鼻を近づけクンと嗅いだ。

微かなタバコの移り香が今夜はやけに気にかかる。

（そういえば、北の方にも水場があった筈だ）

ライコと一緒に遠くから見ただけの水場はここから比較的近い。

いつもの水場より水がやや濁っているから飲用には向かないだろうが、ちょっと水を浴びる程度なら問題ないだろう。

蒸し暑さにウンザリしていた事もあり、ミソラはライコに黙って水場へ向かった。

夜目は利くので暗い森を歩くのは怖くない。この島に大型の肉食動物がいない事もミソラを大胆にさせた。

さほど歩かずに到着した水場は、静かな水面を月明かりに煌かせて

いた。

スルリと全裸になり、武器と服を一纏めにして木の陰に置く。

爪先で水を撥ね上げ、気持ちよさにミソラは笑った。

水を掻き分けそのまま腰の深さまで数m進む。

汗ばんだ体に水をかけている時、ようやくミソラは異変を感じた。月明かりに光る黄色い双眸。向こうから悠々と水面を進んでやってくる大きな影がある。

（――ワニか?!）

ミソラはすぐさま反応し岸へ向かう。戦闘時に覚えのある警鐘が脳内に鳴り響いた。

武器は陸だ。さすがに素手でワニには適わないだろう。

ワニは獲物を水中に引き込む。強靱な顎に噛まれれば腕や足の一本は覚悟しなければならない。脳が急所だと言われるが、ミソラには狙って殴打する自信もなかった。

なんとか岸にたどり着き武器に手をかけた所で背後に水音を聞いた。

（間に合うか?!）

振り向きざまに剣を抜き、迫るワニの鼻面を渾身の力で弾く。

「ナイフでワニ退治とは荷が重いな」

思ったより冷静な声が出たが、ミソラは内心焦っていた。一度捕食に失敗したせいでワニは怒り狂っているようだ。

退路を素早く確認する。ナイフで威嚇し前方を睨みながら素早く後退するが、ミソラという獲物を諦めきれずワニは追ってきた。

ミソラは前方のワニと足元に全神経を向けていた。だから横からもワニが迫ってきていることに気づくのが遅れた。

（な?! もう一匹だと?!）

ミソラの目が月明かりに光るワニの牙を見ながら驚愕に見開かれる。駄目だ、やられる。

そう思ったときミソラの体は勢い良く後ろに引かれた。ワニの口がバクンと空で閉じるのが見えた。

「――ミソラ」

「ライコ?!」

ミソラは状況に頭が追いつかない。

ライコはミソラを抱えると数メートル先の太く高い木の上に軽々と登った。

ミソラの心臓はバクバクと落ち着かないが、危機は去ったと安心する。何か言わねばと強張った顔で振り返るとライコはミソラを冷たく睨んでいた。

何故ここに? という間も礼を言う間もない。

ライコはそのままミソラの剥き出しの肩を容赦なくギチリと噛んだ。

「あっつつつ!」

「――俺に黙って北へは行くなと言った」

ミソラの肩には大きな歯型がつき、破れた皮膚には血の珠が浮かんだ。

ライコはその血を痛みを感じるほど何度も舐めた。

「あれに噛まれていればこんなものでは済まない」

痛い目に合わされているというのに、ミソラはライコに何も言えなかった。

ライコの言う事が正しいからだ。

その時になってようやくミソラはライコに言われたルールを思い出した。

南側では自由にしていいこと。水浴びは一緒にここでということ。基本的にライコはミソラの行動を縛ったりしない。そんなライコが制限する意味をミソラは深く考えていなかった。

(ワニがいるからか……)

ミソラは自分の考えの足りなさを恥じた。

「悪かった……」と心から謝るミソラにライコは何も答えない。

しかし抱えるライコの腕に力が入ったから、ミソラもライコの背に手を回した。ライコの温もりにミソラの中で何かが動く音がする。

「……少し待って」

やがてライコは脅える様子もなくワニがいる中にヒョイと飛び降り、ミソラの服を掴むとすぐに木の上へ戻ってきた。

ライコに抱えられたままミソラは寢床へ連れ戻される。

おしゃべりなライコが口を開くことはなく、しかし朝までミソラをその腕から放してはくれなかった。

第4話

あれから数日。

ミソラとライコはどこかきこちない。

ミソラは普段同様、普通にしているのだがライコが変だ。

ふとした時に背中に視線は感じるのにミソラが振り返るとスイッと視線を避ける。

いつもなら鬱陶しいくらい纏わり着いてくるくせに、あまりミソラに触れなくなった。

まだ怒ってるのだろうとミソラは思い、悲しくなる。

この島で人間に唯一危険な存在はあのワニだ。

ミソラが考えた通りワニがいないのはあの高台の水場だけ。ライコは遠いがそれである水場を使っているのだという。

「ミソラに言うのを忘れてた俺が悪い」

ライコはソップを向いて言っていたけれど、自分も疑問に思ったのなら聞けばよかったのだ。

タバコの匂いなど気にしないで、いつものように寢床で『臭い』とライコに文句を言われながら一緒に眠れば良かった。

そう言ったらライコは機嫌が悪くなったのか飛んで行った。

ミソラは途方に暮れていた。どうしてライコを怒らせてしまうのかわからない。怒るライコをどう扱っていいのかもわからない。

戦うのは得意だが、軍では命令を聞くことが全てだった。

絡んでくる奴は無視したし、直接危害を加えようとした奴らはぶちのめした。

喧嘩をするほど親しい友人はいなかったから、こんな時の仲直りの方法などミソラにはわからない。

ライコに噛まれた左肩が引き攣るように微かに痛む。
力なくうな垂れていると耳が聞き慣れた音を拾った。

瞬間的にミソラは顔を上げる。

極彩色の鳥たちが梢を揺らし一斉に空へと飛んでいった。

（あれは！？）

ゴーツという低い唸り。

空を見上げてミソラは必死に音の正体を探した。そして見つけた影に慄く。

ミソラの顔にかかる影は軍用機のもの。機体のマークは――。

ミソラは走り出した。力が抜けそうになる足を叱咤しながらジャングルへ飛び込む。

馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ！

今までなぜ放っておいた！

早く海に切り捨てておけば良かったのだ！

「ライコ……ライコ！」

ミソラの必死な呼び声に樹上からライコが降ってくる。

「どうした?!」と聞くライコにミソラはしがみ付いた。

広い背中に抱きつくとしどしど安心出来たが、ミソラの指先は知らずに震えていた。

ミソラの異常な様子に、ライコも驚きながら強く抱きしめ返す。

「ライコ……」

「ミソラ？」

おそらく軍は発信機を追跡してきたのだ。

発信機はミソラの右腕の骨に埋め込まれている。

埋め込んだ時は臆病者共と内心せせら笑っていたのだが、今になってコレに脅えさせられるとは皮肉なことだ。2日前に捨てた腕時計のように簡単に破壊することも出来ない。今更ミソラが右腕を切り落としたとしても、すでにこの辺りだと目星をつけられているならいずれ遠からず見つかってしまう。

嫌だ。戻りたくない。

ミソラはこの島に居たかった。

ミソラを純粹に求めてくれたのはライコだけだ。

例え今気まづくてもミソラはライコの傍にずっと居たかった。

軍になど、息をして生きているのかわからなくなるあの生活になど戻りたくない！

（――しかし、軍がこの島に上陸したら）

奇跡のようなこの島は人の手によって簡単に壊される。

動物達は追われ、森は資源として伐採され、調査という名目で山や土壌が深く抉られる。

その尊さを認めようが認めまいが、それだけ戦争という荒廃に晒された世界は喘いでいるのだ。

そして、とミソラは目を閉じた。

ライコも必ず利用されるだろう。

超人的に強いライコ。彼を知れば軍が放っておく訳がない。

素質のある彼に鎖を付け肉体を改造し意思を奪う。ライコが抵抗すればそんなことさえ奴らはしかねない。

ライコは血に塗れた醜い争いの場へ否が応でも引きずり込まれるだろう。

許さない。

想像の中でさえ瞼の裏が真っ赤に燃えた。

絶対に許さないともう一度心に刻む。

それは自分が死ぬことより辛いとミソラは思った。自分が死んでもそれだけは阻止してみせるとミソラは思った。

そこでやっとなミソラは自分の気持ちの変化に気が付く。

ミソラは決意を込めてライコを見上げた。

「ライコ、迎えが来た……」

「ミソラ？」

ライコの青い目が好きだ。ボサボサの長い金髪もライコには良く似合う。

ミソラは踵を上げてライコの頬に手を伸ばした。

ライコも不思議そうにしながらミソラが届くように腰を屈めた。

「私は帰る」

ライコの頬がピクツと強張った。

ミソラはその動きを宥めるように微笑んで手を這わす。

「今までありがとう。忘れない」

「ミソラ、なぜ？あの音を出す鳥か？嫌だ」

ライコが歪んだ表情でミソラの手首を掴み、背中を木の幹に押し付けた。

出会った時の様だとミソラは笑った。

お互いの表情はあの時と逆だけれどミソラはまた笑う。
本気で怒ったライコの顔も今のミソラには愛しかった。

「どこにも行かせない。ミソラは俺の番だ^{っがい}」

「ライコ、聞け」

「駄目だ」

ギリリと力を込めたライコにミソラの手首は悲鳴を上げた。怒りの炎を目に宿し顔を近づけたライコ。

同じ高さで視線が合った。

ライコの与える痛みが自分への執着の強さだとミソラは思う。だからミソラは笑いながら言った。

「ライコ。これではお前に口付けが出来ない」

ライコがピクンと力を抜いた。

ミソラはそのまま目を閉じ、ライコに唇を重ねる。何度も角度を変え思いをこめて唇を食む。

彼の唇を丁寧^{ていねい}に舌尖で舐めると、驚いて固まっていたライコもミソラの唇を舐め返してきた。

自分の真似をしてくるライコが可愛くて仕方ない。

ミソラがライコの硬く閉じた歯列をそっと舐めて口を開けるよう促すと、ライコはミソラを強く抱きしめ舌を甘噛みしてきた。

（勉強熱心）

そう思って少し唇を離して笑ったミソラにライコはムツとすると、むさぼるように唇を押し付けた。

いつの間にか自由になった両手でライコを抱きしめ、彼の背中の大きさを確かめる。

許した口内にライコの舌が入ってくるのをミソラは喜んで迎え自分から舌を絡めた。

一度舌を引いたライコも少しづつミソラのように舌を絡め、2人の口付けは深くなっていく。

自然とライコの手がミソラの体を探っていたが、それでいい。忘れない、絶対に。ライコにもミソラの事を覚えていて欲しい。

息が上がったライコとミソラは唇を離して至近距離から見つめあった。

ライコの瞳が熱を帯びている。

その目を見ながらミソラは微笑み、涙が零れるのを感じていた。軍用機の音が戻って来たのかまた近づいてきた。

確実に自分を探している。ミソラはもう時間がない事を知った。

「お前が好きだ。だけど私は行かなければならない」

「俺が好きなら傍に居ればいいだろ?!」

「違う。好きだから私は行く」

ライコには意味がわからないだろう。好きだから行くなんて矛盾している。

だがミソラはわからなくていいから彼に伝えておきたかった。彼を守る為ならどこで死んでも悔いはない。

「ミソラわからない」

はたしてライコは困惑していたが、真剣な顔でミソラを見下ろす。

「ミソラは何に苦しんでいる？」

「苦しくはない。私は私のために軍へ戻るだけだ」

「嘘だ。ミソラは泣いている」

ライコの大きな指がミソラの涙を掬い取り、ゆっくりとその指を口に含んだ。

「海の味」と鋭い目に見つめられて、ミソラは顔を下げた。

ライコの青い目を見続けていれば口から「行きたくない」と出てしまいそうで怖い。

「私を見るな」

「ミソラ？」

「——もう行かなければ。ライコ。元気で」

もう一度だけ。

ミソラがライコを抱きしめる。ライコの体が大きすぎて、この手に全てを抱きしめられない事が悔しい。ミソラは精一杯の力を込めてライコの肌の感触を覚えると、温かい胸に口付けを一つ落とす。

ライコに赤い印を付けるとミソラは「ではな」とスルリと身を離してあの崖に向かって歩き出した。

見晴らしの良いあの崖ならば軍もミソラを発見しやすい。

ミソラには軍用機に収容されてからしなければならないことがある。ミソラの体には右腕に発信機がつけられているのと同様に、左胸に超小型の高性能爆弾が埋め込まれている。

自国からの逃走防止と敵国への最後の攻撃手段。2つの意味を持つそれをミソラは今、心から感謝した。

例え拘束されるような状況でも、奥歯の下に仕込まれたスイッチを押せば爆発させられる。

この島から離れた場所で情報を知る者ごと軍用機をミソラは海に沈めるつもりだった。

涙はもう零れない。

これから向かうのは戦場なのだから。

「許さない」

だが、数メートル歩いたところでミソラはまたライコに強く拘束された。

「崖で軍を待つ。放せ」と暴れるミソラを無理やり抱えて、ライコに連れて来られたのは寝床のツリーハウスだった。

ライコは荷物のようにミソラを床に放り投げると、痛みに呻くミソラにかまわず部屋の隅の天井を押した。するとそこに四角い穴が開く。

ヒョイと梯子も無しに上に上がったライコは、しばらく天井裏を歩き回っていたが、やがて穴から顔を出しミソラに向かって手を伸ばした。

疑問だらけの不可解なライコの行動を見ていたミソラもその手を掴んで上へ上がる。

「な、に？」

その光景にミソラは目を疑った。

このツリーハウスに不似合いな広い屋根裏があるとは思ってもいなかった。

しかしそれよりも。

大きな書棚に並ぶ専門書の数々。壁一面に機械が何台も並び、しかも起動している。

大きな机の上には数台の小型コンピューターや書きかけの書類が散乱していた。

「よし」と机の上を物色し始めたライコの口調はのほほんとしたものだったが、ミソラは激しく動揺していた。

「ラ、イコ。これは？」

「父が使ってた。死んでからは俺が」

「はぁ？」

ミソラに似合わぬ間抜けな声が出たのは仕方ないだろう。

ライコは「狭くて頭ぶつけるんだよな」と文句を言いながら、目の前で機械をいじりはじめた。

「嘘だろ……」

呆然とするしかないミソラにライコが古びたノートを投げてきた。

「父がお前の番にと残したものだ」

ライコは作業に戻ってミソラを振り向きもしない。

ミソラはため息をついてノートを開いた。

第5話

——中略——

●●●年△月

ああ、なんて事だ。

恐ろしく取り返しのない物を完成させてしまった。

新型の生物兵器MOSCH（Mutation of sleeping chrysalises）だ。

これを国に渡すべきなのかどうかを、私はまだ迷っている。

妻や息子に平和な世界をと望んだだけなのに、想定外なこんなものが出来てしまった。

生み出してしまった事を後悔しているが、科学者の性か『これ』を捨てることも出来ない。

戦争の死者はこれから増えるだろう。

いずれ生まれたばかりの私の息子も戦いへと駆り出されてしまう。

どんな方法でもいいからその前に止めたい。

妻と息子を守るためなら悪魔になってもかまわないと、そう思うのは罪だろうか。

ただ私にその結果を見る勇氣はない。

卑怯者だと罵ってかまわない。

見たくない、見たくないのだ。

●●■年☆月

今日妻が死んだ。

病弱な妻は息子を産んでから寝たり起きたりの生活だったが、通院の帰りに敵国への抗議デモに巻き込まれた。

誰かが投げた火炎瓶が1台の車のフロントにぶつかり、運転手がハンドルを切り損ねたのだ。

争いたいなら勝手にするがいい。

妻を——俺を息子を巻き込むな——！！

アイシャ、君を失って俺たちはどう生きればいいのだ——。

嘘だと言ってくれ。

これは悪夢だ。

誰か早く俺を起こしてくれ。

●●●■年△月

アイシヤ。

アイシヤ。

アイシヤ。

君が居なくなつて2ヶ月が過ぎた。

呼んでももう返事する君はいない。

●●●■年◇月

アイシヤの死に不審な部分がある。

馬鹿な……。

だが、もしソレが本当ならば……。

調査を開始しよう。

●●■年○月

今日、MOSCHを国に渡した。

何度も思い留まろうと思ったが……。

アイシヤ、すまない。

私のせいだ。

君の死がアレを嗅ぎつけ欲しがった国に仕組まれたものだったとは――。

私が、君が、産まれ育った愛しかった祖国。

私はもうこの国を愛せない。

君を殺したこの国をどうしても許せない。

君はもういない。

私はどこか壊れてしまった。

だから。

私がアレを渡したのは東の敵国だ。

かねてからの計画通り、俺と息子はこの国を出よう。

●●▲■年▽月

ここはなんて平和なんだろう。

聞きたくない話も見たくない現実も全てが遠い。

わずらわしい事は何もない。

見たこともない多額の報酬でこの島を買った。

どちらの国とも私達の事は忘れ今後一切関わらないと言質をとっている。

——いつまで守るかわからないが。

息子も8歳になった。

元気に成長している。

私に似て飲み込みが早く教えるのが楽しくて仕方ない。

あの垂れた目がいつも君を思い出させるよ。

成長した姿をどこかで見ていてくれたら——いや、君なら天から見ているか。

息子はいずれ私の後を引き継いでこの島を守るだろう。

この”楽園”だけは誰にも壊させない。

向かってくるなら容赦はしない。

障壁の強化を図ろう。

●●▲▽年■月

なんて事だ。

体の不調が続いている。

自分の病名がわかるというのも嫌なものだな。

私はいいが、残される息子が心配だ。

あいつを決して1人にはしない。

何か手を考えよう。

●●▲◎年▼月

病状は進んでいる。

息子には”楽園”を守る知識を全て与えた。

私が死んでもあいつはやっていける。

『これから』を心配しても仕方がない。

息子を信じて私は逝こう。

アイシャ、早く君に会いたい。

君は悪魔になった私を——あの頃のように真っ赤になって目を吊り上げて怒ってくれるかい？

（——ここから先が日本語で書かれている——）

息子に英語以外の字は読めない。

願わくば貴方が日本語を読めるといいのだが。

これまでの経過はわかっていただけただろうか？

自分勝手な狂った悪魔、それがライコの父であるこの私だ。

息子には秘密だが、この島近辺で使われた転移陣の軌道を自動で修正するプログラムを作った。

10〜20代の若い女性をターゲットに島上空に転移させるようにしたので、貴方はさぞ驚いたと思う。

すまない。上空に誘導するのが精一杯だったのだ。

この辺りを転移陣で移動する者は滅多にいない。

そして転移陣を使った貴方は一般人ではないね？

貴方が無事だという奇跡のような確率に私は賭けた。

息子も貴方を助けてくれていればいいのだが――。

貴方には本当に申し訳ない事をした。

これを読んでいるという事は、息子と共に居る事を選択してくれたのだらうと思う。

親の勝手で息子をこの島に縛りつけ、貴方まで縛り付ける事になってしまった。

それが正しい事なのか間違った事なのか今でも私はわからない。

どうか許して欲しい。

散々な目にあわせた私を信じられないかもしれない。

だが死に行く私の精一杯で”楽園”に居る限り貴方達を守る事を誓おう。

どうかあれと幸せに暮らして欲しい。

息子をよろしく頼みます。

息子はまだ私を偉大な男だと信じているだろうか？

私の全てを話すかどうかは貴方に委ねよう。

あいつの驚く顔をこの目で見れないのが残念だ。

第6話

「――」

ミソラは驚き過ぎて声が出なかった。

あの……、あの生物兵器はライコの父が作ったのか？

その知識・技術といい、国の技術者がよってたかって悪戦苦闘している転移陣を書き換える事が可能だという事といい。

間違いなくライコの父は稀代の天才だ。

障壁の記述があったが、この島にか？

本当だとしたら小さいとはいえ島ひとつの障壁をたった一人で構築したというのだろうか。滅茶苦茶だ！

それにその技をライコが継いでいるという。

ミソラは恐々とライコを見上げるが、ライコは見えないスピードで何台ものキーボードを操作するのに夢中だった。

「っと。終わり」

画面を閉じた軽快な指先。その笑顔はいつものライコだ。

実際目の前で操作が行われているというのに信じられない。

アンバランス。

自分が知っているライコとかけ離れた姿にミソラはなんと言っていないかわからなかった。

「お前……機械がわかるのか？」

ようやくミソラの喉から出た言葉は自分でも間の抜けた疑問形で――

今見てたのに私は馬鹿か。ミソラの顔が赤らむ。

「この物なら全部わかる。使い方は父に教えてもらったから簡単だ。この島で俺にわからないことは無いよ」

気負うでもなく彼は言う。

ライコは父の面影を懐かしむように壁の機器へと手を沿わせた。

「何を、した？」

「せきゅりていの強化。ミソラを苦しめてたのはあの音を出す鳥だろう？あの鳥とミソラが飛んでいくのは嫌だ。あの鳥は俺の島には近づけさせない。だからキンキュージタイ用のしすてむを動かした。”楽園”は今閉じている。あの鳥はここには近づけない。ミソラもこれでどこへも行けない」

「ライコ、もうちょっと詳しく説明してくれ」

「ん？島のシヨオヘキを強くした。人も動物もこの島には入って来れないし出れないよ」

ライコのどこか舌足らずな説明では、ミソラはやはり良くわからなかった。

とにかく『キンキュージタイ』『シヨオヘキ』というのは緊急事態、障壁のことだろう。

どこまで信頼できるかわからないが何度も上空を行き来しているらしい軍用機がまだ島に着陸できていないのは事実だ。低い音は随分遠くに聞こえた。

十
十
十
十
十

「タカダ大尉！やはり島上空に障壁が展開されています」

「馬鹿な。何故こんな島にそんなものがある！」

「いかがいたしますか？」

「――本部に連絡を取れ。ミソラ・モリザト少尉が何者かに匿われている様だ、とな」

「はっ！」

十
十
十
十
十

ライコが笑いながらミソラを自分の膝の上に抱いて座る。

チヨイチヨイとノートを突いて、ミソラを見つめた。

「ミソラ、読んだ？」

「あ、ああ。これは私が読んでも良かったのか？」

「勿論だよ。父が言っていた。お前が心から愛し信じる番にだけこれは読ませろと。何て書いてあった？」

「え？」

ミソラは目を輝かせて聞いてきたライコに驚く。

「ライコ、知らないのか？」

「俺は読んでいない。父は知りたければ番に聞けばいいと言っていたしな」

「本当に？」

「読む必要がない。だからミソラが来るまで楽しみにしてた」

父の言いつけをジッと守ってきたライコ。

好奇心の強い少年が誰にも咎められない環境で約束を守ってきたというのか。

「父が俺に読まなくていいと言ったのはそれがその時必要ないものだからだ。父は俺に必要な事を何でも知っている偉大な男だった」

誇らしげなライコにミソラは軽く眩暈を感じた。

ミソラも家庭に恵まれた訳ではないが、ライコの父の子育てが一般的ではなかったことはわかる。

父を盲目的に絶対者として信じるライコの生き方がなんとなく哀しかった。

「で？」

「あ、ああ。ライコの母が事故で死んだ事やこの島にライコと2人で来た理由が書いてあった。自分が死んだ後はライコがこの島を守るとも」

生物兵器や転移陣の事は言わないほうが良い気がした。

パラシュートでさえ見たことが無かったライコだ。父の真実など知らなくてもいい。

ライコは「なくんだ」と少しばかりつまらなそうに鼻を鳴らした。

「みんな知ってる事ばかりだ。母は肉体を抜け神の元に住んでいるんだ。父が白い花のような人だと話してくれた。父も肉体を抜け鳥となって母の元へ行ってしまった」

机の上の古びた聖書をライコは手に取った。聖書の真ん中辺りに黄ばんだ押し花と古そうな鳥の羽が挟んである。

「この島へ来たのは母に一番近い場所だからだ。ここに居れば父も俺も母を身近に感じられるから。この花の名は”アイシャ”。父と名付けた。アイシャの白い花が咲く場所で父とはよく昼寝してたんだ。ミソラにも今度見せてやる」

小さいライコと父が白い花に包まれて眠っている。ライコの父は何を思っていただろう。

その光景が目に見え、ミソラは切なくなつてそつとライコの胸に顔を埋めた。

ライコの胸のドグダグが目の前で揺れる。

「では、これは父の形見か？」

「これか？これは俺の。小さい時父からもらった。父も持っていたが、死んだ時に言われた通り一緒に埋めたんだ」

一枚しかないドグダグは黒ずみ読みづらいが、良く見ればライコのフルネームと出身国、そして『屍はこの島に』とメッセージが彫られている。

きっとライコの父のドグダグにも同じ文句が彫られていた筈だ。

ミソラは目を瞑りライコの父を思う。

この地以外に還る気がない彼の人の覚悟を感じた。

それに比べて自分はなんて覚悟が足りないんだろう。

ミソラはどうしていいかわからなくなる。

あれだけ堅く決意したというのに、時間が経てば経つほど行きたくなくなる。

ずっとこのままでは居られないとミソラは知っているのに。ライコの傍に居たいと心が悲鳴を上げていた。

（無様だ。諦めきれないとは）

本当にこのままこの島に居てもいいのだろうか？軍はミソラを諦めるだろうか？

「ライコ。聞いてくれ」

ミソラは湧いてくる焦燥感に身を焦がしながら真剣な口調でライコに話した。

「私は軍に追われている。だから、今軍を追い払ったとしても何度でもこの島へ奴らは入ろうとするだろう。私はここに居ないほうがいい」

「何度でも来るがいい。俺は負けないしお前も渡さない」

その言葉に胸が熱くなるが、ミソラの不安は消えない。

「本当に何度でも来るんだぞ？私はお前まで巻き込むのが嫌だ。私が居ればお前も追われる事になる。この右腕の骨の中には発信機が付いているから私の居場所はすぐに奴らにわかってしまう。この島の外は荒れた世界なんだ。だからこの豊かな島も強いお前も奴らは滅茶苦茶にしてしまうかもしれない。障壁だってずっとこのままには出来ないだろう？それに私はお前が思うような綺麗な人間じゃない……」

次々と不安を口にするミソラを、ライコはそつと止めた。

どこか泣きそうなミソラの頬をスルリとライコは撫でる。ミソラの肩を抱く腕に力が入った。

「かまわない。俺の傍にいろ。お前以外に俺の番つがいはいない。お前がどこかへ飛んでいくというなら俺もついて行きたい。だが俺は父からこの島を任されている。俺は”楽園”の”王”だ。だからお前がここに残って欲しい。お前が俺を置いて行こうとするなら――俺はお前の残った羽も切り落とす。それでも抗うならお前は箱に閉じ込める。俺にそんなことはさせないでくれ」

ライコには何度も求愛されてきた。

しかしミソラにはそれがライコの正式なプロポーズに聞こえた。

愛する者を奪われ憎しみに故郷を捨てた人。

純粹だがどこか歪んだ孤独を知るライコ。

大きなものに踊らされ擦り切れたミソラ。

誰が正常で何が狂っているのだろうか。

ミソラはわからなくてももう構わないような気がした。

「――番が私で本当にいいのか？」

「ミソラ、お前の言う事は難しくてわからない。番とは常に傍にいろものだ。お前に古い巢があったとしても、俺とここで新しい巢を作ればいいだろ？それを邪魔する敵がいるなら俺が巢を守るのは当然なんだが、お前の元居た所の奴らは違ったのか？番は戦いもしないのか？」

そう言って「まあ、知らない種類ならそういうこともあるか」と考えを纏めたライコ。

何やらいろいろ間違っている気もするが、ライコの考えはシンプルだった。ミソラを守るというライコの意思。揺らぎは一つも無かった。

自信満々のその態度に、ミソラは1人で気負って考え込んでいた自分の方がおかしいような気にさせられたが――。

「お前が私を番だと言い、私を守ると言ってくれるのは心底嬉しいんだが、まだ怒ってるだろう？」

「あ？怒る？俺が？」

「ああ。隠さなくていい。最近お前の様子は変だった。私の事が嫌

いになったのならそう言ってくれないか？今なら私はお前を……」
「違うよっ！」

大声を出したライコだが、その後何故かモジモジしている。

「あれは、ミソラが……」

「私が悪かったのは反省している」

「違う！そうじゃなくて……。ミソラ俺のこと好きだろ？」

「え？」

「気づいてないの？ミソラ最近イイ匂いがする」

「匂い？——って、ええ？！」

何を言われてもいいように身構えていたらライコはとんでもない事を言い出した。

ミソラがライコを好きなのは否定しないが匂いとはなんだ！顔が沸騰するように熱い。

ライコが目細めてミソラの髪で遊び始めた。

「俺が触れると匂いが強くなる。ミソラの発情期が来たんだって思った。けどミソラ全然気づいてなかったし、無理して怒らせたり泣かせたくなかったから……」

ライコにしては気を使ってくれていたようだ。

火照った顔を見せたくなくてミソラは下を向いて口ごもる。

困った。調子が狂う。これではどちらがしっかりしてるかわからんな、とミソラは頭の片隅で冷静に思った。

「自覚できた？なら俺もう我慢しなくていいよね？」

ライコの瞳が妖しくなり後頭部を引き寄せられて、ミソラは慌てる。

「ほら強くなった」とライコの言う通りに下腹部が疼くを感じ、ミソラは恥ずかしさに身悶えながら抵抗した。ライコとするのは嫌じゃない。でも今はどう考えてもその気になってる場合じゃない。

「ラ、ライコ！待て！まだ話がっ」

「でも、ミソラ。しばらくはあの鳥は来ない。父もキンキュージタイにはオクノテがあると言っていた」

「オクノテ？」

「俺は聞いてないけどね？」

「どんな、あ！こら、どこ触ってる！やつ、あ！待て！ライコやつ！と、とりあえず待て！」

——結局少々激しいスキンシップはキレたミソラがライコの腕に噛みついたことで終わった。

むくれるライコにミソラは半泣きで今後1週間の蜜月の代案を出し、ようやく機嫌を直してもらう。2日間というミソラに対し、目をギラギラさせたライコは1週間と言って譲らず。ミソラは押し切られたのだ。

ウキウキ上機嫌なライコに抱かれながらミソラが『体持つだろうか』とため息を吐いていたのはまた別の話。

+++++

実際、ミソラ達の知らない事ではあるが東アジア連合とヨーロッパ連合には何者かからの通信が届いていた。

曰く『“ラクエン”ニテヲダスナ。サモナケレバMOSCHハアメリカノテニワタル』と。

各国の首脳陣は1人の天才科学者を思い出し、青くなった。彼との約定はまだ忘れていない。忘れられない。大国アメリカの手にはあられは渡してはならないのだ。

「誰が”樂園”に近づいた?! 馬鹿者を探して呼び戻せ!」

その命令が東アジア軍に伝わるまであと少し。
タカダ大尉に伝わるのももうすぐ。

+

頭上を旋回していた軍用機が突然方向を変え遠ざかっていった。ミソラはライコと2人で崖の上に立ち国へ帰っていく機体をずっと眺めていた。

「オクノテも効いたようだ」と勝ち誇って笑うライコを見上げる。

こんな形で軍から解放されるとは思ってなかった。

また追っ手が来るといふ不安はあるが、今度はライコと2人で立ち向かうのだから少しは気持ち楽だ。

自分には少し前まで何の未来もなかったのに、今はライコがいる。大事なものを得てしまったら、今までのように無関心無感動では生きられなかった。

ライコの大きな手をギュツと握る。

「ライコ」

 $\lceil h$

ミソラは左胸に手を当てた。

「もう一つ話しておかなければならない」

「ミソラ？」

「私のここには小型爆弾が埋められている」

「爆弾？」

「爆発するんだ、ああ、大きな炎と熱風が弾けて襲ってくる感じが？爆発させるには2種類の方法——私か軍の誰かが起爆スイッチを押せばいい。もし奴らにスイッチを押されたら……私が言ったら1分以内に私の心臓を破壊してくれ。いやな事を頼むが、それで爆発は止ま——」

ミソラはまたも言い切ることが出来なかった。ライコに口を塞がれたからだ。

「ミソラ。ミソラが死ぬ時は俺も死ぬ時だ」

優しくに垂れるライコの青い瞳に、ミソラは何も言えずライコの腰に抱き付いた。

嬉しいと口に出したらライコはどう思うだろう。ミソラの胸に空いていた最後の穴がライコで埋まっていく。

（——ああ、ここにあった——）

ミソラが心のどこかで探していた一番欲しいもの。

ミソラはライコの温かさを感じながらようやく生きていく実感と安堵を得た。

「俺が爆発なんてさせないけどな」と軍用機が去った方角を睨みつけるライコのその目が死ぬほど怖くて「どうやって？」とは聞けなかったけれど。

ライコにとってミソラが唯一であるように、ミソラにとってもライコが唯一だ。

手に入れた幸せにミソラは泣いた。

ライコは黙ってミソラを抱きしめていてくれた。

寄り添う影が段々長くなっていても、2人が離れる事はなかった。

epilogue—数十分後—

「——水浴び」

「え？」

しばらくの間そのまま一緒に海に沈んでいく夕日を眺めていた。

寄り添いながら甘い雰囲気を楽しんでいたミソラだったが、呻るように言われた言葉に目をパチクリさせた。

ライコは性急にミソラを抱き上げる。

水浴びは日課だが、なんでいきなり？

「ライコ？ 陽が完全に落ちるまでまだ見ていたい」

「明日にしろ」

顔に疑問を貼り付けたミソラにライコは悪魔のように笑った。

「我慢できるか。こんなに匂うのに。俺はここでこのままでもいいけど、ミソラは嫌だろ？」

「??? っつ！ ばっバカ！」

足の付け根をスリと撫でながらライコが耳元で囁く。

『夕日はいつでも見れる、そうだろ?』

これ以上赤くなれないミソラは返事の代わりにライコの首筋を噛ん

だ。

次に夕日が見れるのは1週間後になるかもしれないと、不吉な予感を感じながら。

赤くなったり青くなったりするミソラの髪に口付けを落とすとライコは樹上に飛んだ。

枝に引っ掛かっていたらしい極彩色の羽が一枚ユラユラと地面に落ちていった。

——貴方のいるここがわたしの楽園——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7356/>

極楽鳥<ゴクラクチョウ>

2010年10月9日13時35分発行